
第 3 2 世界

閃夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第32世界

【Nコード】

N9974Y

【作者名】

閃夜

【あらすじ】

「英雄の一族の末裔であるルディアと、謎の少年ユオンは、特殊な生まれ方をしたために、大きな魔力をもっていた。大きな魔力は、時には人々を助け、時には傷つける。彼等は出会い、お互いを支えながら、その力をもつてどう生きるのか。見物だとは思わないかい？ ウイドン。」

「トラスト…お前はさっさと仕事をしろ。」

「つれないな。まあいい。一人で楽しむとするか。」

はじまり

緑茂る森の中。ひっそりと建つ屋敷があつた。

そこには、この世界の列強の国々に一目置かれている、ある一族が住んでいた。

かつて世界の危機に1人で立ち向かった英雄ルディル・ファースの末裔の一族。

その功績は、3000年たった今でも詩人達に輝かしく語られている。また、その子孫である方々も、国々の争いの仲立ちをしたり、部族間の抗争を止めたり、魔物退治をしたりと、多くの功績を残し、あらゆる人々から尊敬されている。

それは、現代当主であるアルス・ファースも例外ではない。

しかしながら、ご当主アルス様はただ今現在進行形で、列強の国々の王城にも負けない立派なお屋敷の中庭の円形の噴水の周りをぐるぐるぐるぐるぐるぐる歩き回っていた。時々ふと立ち止まり、何か考えているかと思うとまた歩き回るというのを繰り返していた。

細身で長身。銀の髪に深い藍色の瞳。容姿端麗なアルスが、ため息をついて、ぼーっと屋敷を眺め、そしてまた忙しく噴水の周りを回るのだ。

そんな様子を端から見ている使用人達は、

「アルス様、今日は落ち着きませんね。」

「本当に。世の人々が、この様子を見たらどう思われるかしら。」

「アルス様ほどの美しい方なら、何をしていても素敵に思えるわよ。」

「そうでしょうね。まあ、今日ばかりは仕方ありませんね。」

こんな話をしながら呆れながらも微笑ましくその様子を見守っている。

そんな中、エントランスから、先日5歳になったばかりの長男レジェル・ファールラスが出てきた。

レジェルは、父の様子を見ると、呆れながらも珍しい光景に少し笑った。

「父上様。もう少し落ち着いてはどうですか？」

「む…レジェルか。どうだ？ルイーゼの様子は。」

「母上は変わらない様でした。が…。」

レジェルは、困った様に黙り込む。

「どうした？気になる事があるのなら言ってみなさい。」

アルスが促すと

「父上様は、精霊達が静か過ぎると思いますませんか？」

レジェルは、屋敷の周りの森の方に目をむける。

「そうだな。」

それはアルスも気になっていた事のように、眉を曇らせる。

「精霊達は、この日をとて楽しみにしている様だったのに、何か変です。」

「…森で何かあったのかもしれない。」

そう言うとアルスは掌で空に円を描く。円を中心に薄緑色の魔方陣が浮かび上がり、アルスを中心に風がゆったりとかける。

「風の精霊よ。我が呼び声に応えよ。姿を表せ。」

薄緑色の光が一箇所に集まり、二人の子供の姿をした風の精霊があらわれた。

「え？」

その姿をみて、レジェルは驚いた。アルスも眉をひそめる。

「シルフに、シルフィード。貴方方のような高貴な精霊がなぜここに？西の神殿から出てくるのは珍しいな…。」

驚くのも無理はない。アルスは、その辺りにいる、風の精霊を呼ぶ術を使ったのだ。召喚術を使った訳ではない。それなのに、シルフとシルフィードが現れるということは、彼等がその辺りにいたという事だ。

シルフが、口を開く。

「英雄の末裔。アルス・ファールス。」

「はい。」

アルスが応え、ゆったり礼をする。

「同じく、レジェル・ファールス。」

「は…はい！」

レジェルも父のみよう見真似で、ぎこちないながら礼をする。

辺りにいた使用人達は、精霊を見る事は出来ないが、主の様子と魔方阵から何かを悟り、皆頭を下げている。

シルフとシルフィードは交互に言葉を繋げていく。

「今日、この世界で、大きな力を持った命が生まれようとしている」

「しかし、それはお前の子ではない」

「大きな命は、生まれ落ちる瞬間に大きな力をこの世界に放つだろう。」

「おそらく、大きな命が生まれ落ちる瞬間と、」

「お前の子が生まれ落ちる瞬間が重なる。」

「生まれたばかりの赤子は世界の影響を受けやすい」

「どんな影響を受けるかは分からない」

「例え英雄の末裔といえど、その力に耐えられれば良いが…可能性は低い。」

「運が悪ければ母親も…その時は。」

シルフの言葉に、アルスは顔色を失った。

「精霊達が静かなのはそのせいだ。」

「皆、お前の子を心配している。」

アルスは、大きく息を吸う。

「…大きな命…とは？」

シルフとシルフィードは、お互いに顔を見合わせ、

「神になるべき者だ。」

そう言った。

「神…」

レジェルは信じられなかった。

今日やっと会えると思っていた弟か妹か分からない兄弟が、死んでしまう可能性が高いというのだ。しかも、母親まで危ないと言う。

レジェルは、知らない間に涙を流していた。

「…」

「レジェル…。」

アルスは、我が子を抱き寄せ大丈夫だ。と呟く。自分もつらいだろうに。シルフは、目を伏せる。

「我等精霊もなんとか影響を和らげられないかここに集っている。」

「

「スルトやウィンディーネ、他にも多くの者が来ているのを見た。」
「精霊王も心配している。」

シルフとシルフィードは心配げにレジェルを覗き込む。

「精霊方の助力ありがたく思います。」

アルスは心からの感謝を述べた。

「気にするな。皆好きでしている…。」

シルフがふと止まった。シルフィードも息を飲む。

「…？シルフ？シルフィード？…まさか。」

アルスは二人の様子から悟り、屋敷を仰ぎ見る。

「始まった。」

「アルス。行くがよい」

アルスは一礼してレジェルを抱きかかえると、屋敷に駆けた。風の精の手助けを得ているので、その速さは並のものではない。

アルスにしがみついて泣いているレジェルに、堪え兼ねシルフィードが姿を現す。

「レジェル、もう泣くな。お前は兄だろう?」

シルフィードの言葉に、レジェルはぐっと涙を堪える。

「うん。」

気丈に振る舞って、大人びた言動の多いレジェルの子供らしい言動に、シルフィードは少し安心した。

子供はやはり子供だな。

少しすると、使用人達が慌てふためいている様子が目につくようになった。

「アルス様!!! ルイーゼ様が産気づかれました!!!」

「!!! そうかつ!!!」

アルスが、そう言った瞬間。

地を揺るがすような轟音と、大きな揺れが屋敷を襲った。

「っ!!」

立っているのもやっとな揺れの中、シルフとシルフィードが、ルイーゼの部屋に滑り込む。

アルスは、レジェルを抱えたまま動けずにいた。

「父上様。地の精霊王様が!!」

レジェルの視線の方を見ると、あちようど、地の精霊王がエントランス付近に降り立ったところだった。

瞬間、あれだけ揺れて軋んでいたいた屋敷が嘘のように静かになった。肩のレジェルを降ろす。

独断で精霊王が一人の人間のために動くなど、まずない事だ。

アルスは英雄ルデイルと先代達の偉大さを改めて感じた。

よく見ると、森の先はまだ揺れの中のようなだった。

「アルス様!!お生れになりました!!女の子です!しかし…」

黙った使用人を見て、アルスは青ざめ、部屋に飛び込んだ。

「ルイーゼ!!」

「…アルス…。…つごめ…なさい…。」

ベッドの上で、ルイーゼはボロボロと泣いていた。

部屋には、水の精霊王がいた。

その腕の中には…動く事ない小さな命。

「…ダメ…なのですか？」

たった数十秒の間だったか、アルスはとても長く感じた。

「…残念ながら、私にはどうにも。」

癒しの力をもつ水の精霊王がどうにもならない、もう…どうしようもない。

「っ…そう…ですか。」

アルスは俯き拳を握る。

ルイーゼは両手で顔を覆って泣いている。

レジェルは再び静かに泣き始めた。

使用人達も、精霊達も、誰もが悲しんだ。

「くる。」

何の前触れもなく。レジエルがつぶやく。その場にいたものは、皆驚いてレジエルをみる。

レジエルは、部屋のバルコニーまで行って、その扉を開けた。

「レジエル？」

レジエルの不可解な行動に、誰もが戸惑った。精霊王ですら眉をひそめる。

「ほう。気が利くな。」

頭に響く様な声が聞こえた。

天から、明らかに生まれたばかりであろう赤子を抱えた、短い緑髪の青年がバルコニーに降りたった。

整った顔立ちに、切れ長の目が鋭さを含んでいる。

「ウイドンさま!!?」

精霊達が騒ぎだし、地の精霊王と水の精霊王が膝間付く。アルスはその光景を呆然と見ていた。この世界での最高位の存在が、七人の精霊王達だからだ。

この青年が…神？

アルスは思った。レジェルは不思議そうにバルコニーの青年を見ていた。

「ほら。俺はここまでだ。後はお前がどうにかしろ。」

と、ウイドンが腕の中の赤子に話す。おそらく、精霊達が言っていた、大きな命だろう。

「分かって…ああっ！！だき方を変えるなマヌケ！！僕はまだ首がすわっていないんだ！！！」

またさっきの頭に響く声が聞こえた。

その何ともシニールな会話に、耳を疑ったのは、きっとアルスだけではないだろう。

「失礼ながら、あなた方を精霊達が言う、神と見受けるが、ここにどういった要件でいらっしゃったのですか？」

アルスは、不躰だと思いつつも、聞かずにはいられなかった。淡い期待が急かせる。

「む？ああ。…ウイドン！」

「お前は、いつから俺より上位になった？」

「よいでないか。僕はまだ首が据わっていないんだ！！」

ネタなのか？と思ったのはきつとアルスだけではないだろう。

「はあ…。水の精霊王よ。その子を母親に抱かせる。」

「はい。」

水の精霊王は、ルイーゼにやや冷たくなった小さな命を抱かせた。ルイーゼはまた泣きそうになりながら大事そうにうけとった。

「この子を救って下さるのですか？」

アルスが尋ねると、ウィドンが頷く。

使用人達と精霊達がざわつきだす。

「本来なら難しいが、今回は奇跡的に条件がいい。本来なら千切れ
ていてもおかしくないはずの、生命系もまだわずかに残っている。
この子はとても運の良い子だ。…あるいは…。」

大きな命は、じつとウィドンを見つめる。

「なんだ。」

ウィドンはめんどくさそうに大きな命をみた。

「む。まあ、そういう事にしておこう。」

大きな命は、青く光輝いたかと思うと、ウィドンの腕の中から、身体を浮かせてできた。

「首据わってんじゃねーか。」

ウィドンが口を尖らせて呟く。大きな命は、馬耳東風と言う感じだ。大きな命が、冷たくなった小さな命の額に触れた。すると、大きな命の指先が眩しいほど輝きだして、その場の視界を覆った。

チカチカする目がなんとか辺りを見まわせる程になった時、ルイーズの腕の中から、大きな産声が上がった。

その場にいた誰もが喜びあった。使用人達も、精霊王も、精霊達も。

しかし、よく見るとベッドの上では、大きな命がた倒れていた。

「……！？これはっ」

「大丈夫だ。心配はいらない。」

ウィドンが、大きな命を優しく抱きかかえる。

「神と言えども生まれたばかり。まあ、当然だな。」

「ほんとうに、なんとお礼をいえばよいか!!」

アルスとルイーゼは、ウイドンに、大きな命に、何度も、何度も感謝をのべた。

「トラストの誕生と同時に失くなった命は多い。

前後一年に生まれたいくつかは絶え、今月生まれたばかり者、また、生まれる筈だったものは、ほぼ全て絶えたと言っている。精霊達になるべく新しい命の元に集うように言ったが…。」

ウイドンは、目を伏せる。

同時に、ウイドンと、大きな命の周囲に、緑色に輝く光の粒が集まってきた。

「1人でも多く助かってくれると、我等の…トラストの心も軽くなる。よかった。」

ウイドンは、わずかに微笑んだように見えた。しかし、すぐに真剣な表情に戻る。

「このような生まれ方をした者は、必然的に何かしらの定に縛られるだろう。」

緑の光は幻想的に輝き、彼等の姿を隠していく。

「かの英雄ルディル・ファールスのように…な。」

光が一瞬大きく瞬いたかと思うと、彼等がいたはずのそこには一陣

の風が吹くだけだった。

誰も動かない中、1番に声を上げたのは、レジェールだった。

「父上様！！母上様！！僕の妹は、なんと言っ名なのですか！？」

はやく聞きたくて仕方がないのだろう。口調が弾んでいる。

半分夢見心地だったアルスは、はっとした。そして、同じ状態の、ルイーゼと顔を見合わせて微笑んだ。

「そうだな…。この子の名を決めないと。だが、今決まったよ。この子は…」

「ルディア様——!!」

あれから六年。あの日の大地震は世界を襲った大災害として歴史に刻まれた。

あの時ファールラス家も、精霊フル活用、魔力全開で救出作業にあたったが、多くの人々が亡くなった。

「ルウウディア様——!!」

ウイドン神の言った通り、赤子の死亡率は異常で、あの年に生まれた子は例年の半数にも満たず、当日に生まれたのは妹だけだった。後で調べると、妹の生まれる前約一ヶ月と、後約一ヶ月に生まれた子供は皆無だった。

「ルウウウディイイイア様ああ——!!!!」

…妹は、ルディア・ファールラスと名付けられた。かの英雄のようにあれ。という願いかららしい。

「ルウウウディイイイアアア様ああ——!!!!ほんと出てきて——!!」

「うるさいぞ!カルスト!!」

黒髪碧眼の執事服に身をつつむカルストは、ファールラス家に仕える執事だ。父上様と、同じ年で、昔から付き人をしていたらしい。

「レジェル様！ルディア様を見ませんでしたか！！??」

「また何処かにいったのか…。」

妹、ルディアはなんというか…逃亡癖があつて、隙あらば何処かにいってしまふ。うちの使用人は皆優秀なはずなのだが、彼女の方が一枚上手らしい。

「ありえまんつて。今回は、あのマルタを撒いて何処かにいったらしいんですが…。」

マルタとは、カルストの奥さん。彼女もこの家でメイドをしている。

「カルスト！！お嬢様は見つかりましたか！！?」

噂をすればなんとやら、赤毛に真紅の瞳をしたマルタが向こうからやってきた。

「やあ。マルタ。またルディアが逃げ出したらしいね。」

マルタは、半ば遠い目をして

「レジェル様…。お恥ずかしいですわ。お嬢様はすばしっこいなの。」

「まあ、アルスとルイーゼの子供だからな。と言ってしまえば、すべて丸く収まってしまうのが一番恐い…。」

カルストも同じように遠くを見はじめた。

「お前たちにそこまで言わせるとは…さすがルディアだな。」

唐突に、レジエルは手を伸ばし、二人の間の空を掴む。

「きゃっ！」

何もないはずの所から可愛い叫びが聞こえて、カルストもマルタも驚き、おもわず後ずさる。

「見つけたよ。ルディア。」

レジエルが、ルディアであろう塊を抱き上げると、そこにスーッと金髪をふたつに結ったルディアが現れる。

「なんでみつかるの!？」

ルディアは、金の双眸でレジエルを見る。

「ふふ。ルディアはほんとうに光魔法が上手だね。」

「お兄様には敵わないわ。」

金髪金眼の妹を、銀髪で紫色の瞳をした兄が抱き上げる、その姿は、絵画から抜け出してきたかのように美しい。

「こんなところに!！」

「はあー。とりあえず見つかってよかったですわ。」

カルストとマルタは、安心して気が抜けたようだ。

マルタがレジェルからルディアを受け取り、抱きかかえる。

「ルディア。あまり皆を困らせてはいけないよ？」

レジェルがいつものようにいうと、ルディアは口を尖らせながらも

「はあい。」

いつものように返事をした。

「さあ、ルディア様。これから貴女様の誕生日パーティーですよ。」

「レジェル様も、そろそろ着替えないといけませんね。」

ルディアがマルタに連れられたのを見届けて、レジェルもパーティーの準備をすべく、自室に帰るのだった。

「お兄様には、いつも見つかってしまっわ。どうやったらうまく撒けるのかしら。」

ルディアは、綺麗な桃色のドレスを着て鏡の前にちょこんと座っている。髪を整えている使用人達は、愛らしいルディアをさらに可愛らしくすべく真剣に、ルディアの柔らかい髪を編み上げていく。

完成すると、メイド達から歓声がおこり、可愛いー。欲しいー。などという声がルディアに浴びせられる。

メイドというのはこういう人種の集まりなのだろうと、ルディアは、漠然と認識していた。

「ルディア様。くれぐれも「パーティー会場から抜け出すな。でしょう？分かってるわ。ファースタ家の者たるもの分別はわきまえます。というか、耳にタコだよ、マルタア。」

そう言い放ったルディアだが、いつもそういいながら何処かにいつてしまっのだから困ったものだ。マルタは、ため息を吐く。

「時間ですわ。会場に移動しましょうか。」

マルタに手を引かれ、ルディアは、パーティー会場に向かうのだった。

「あら、まあ！ルディア！！なんて可愛らしいの！！」

「うぐっ！」

ルディアをみた途端に、母ルイーゼは、ルディアに抱きついた。ルディアの金髪と瞳は、母親譲りだ。

「母様…くるしっ！」

「あら、ごめんねルディア。ああっ！もうなんて可愛いらしいの！
？皆！ぐっジョブよっ！！！」

「お褒めに預かり光栄です。」

髪を結ったメイド達が母様と、次の髪型トークを始めた頃、アルスと、レジェル、後からカルストがやってきた。ルイーゼと、メイドにわやくちやにされている。ルディアを見て、苦笑しながらも愛らしい彼女に感嘆する。

「ルディアは可愛いですね。父上。」

レジェルは、ニコニコしながら、アルスに言う。

「そうだな、ルイーゼに似て…将来はさぞかし美しくなる事だろうな。」

アルスは、緩みきった頬を隠そうともせず、娘にでれでれの様子だ。

「あの、ルディア様も、いつかは、何処かに嫁いじゃうんですよね

…。なんか、そう考えるとさみしいなあ。」

カタッ

カルストが、なんとなく言った。

「そうですね。ルディアは、可愛いし、このパーティーで何処その王子が、将来お嫁さんになって下さい！とか言ってくるかもしれないね。」

ガタッ

レジェルがさりげなく会話を続ける。

「そんな事になったらどうするー？アルスー…ってえあれ？」

カルストが、アルスの方を見ると、アルスはとても黒い顔をしておりました。

「ああ。きっと、その国は滅ぶだろうな。…謎の天災によつて。」

ふふふと、怪しげな笑みを浮かべるアルスから、カルストは、静かに距離をとった。

レジェルは、その様子を見て、大笑いする。

「あははっ！父上が言うつと冗談になりませんって。」

そんなこんなで、パーティーが始まり、なんの事件もなく時は過ぎ、パーティーもお開きになりました。謎の天災が何処かの国を襲う事

もなかったようです。

その後アルスの執務室では、

「ルディア様がパーティーを抜け出さなかったなんてっ！！奇跡ですわっ！！」

マルタがハンカチで涙を拭きながらそう喜んでいた。

「成長と言いなさいマルタ。」

ルイーゼが、ワインを飲みながら誇らしげに言う。

「にしても、お嬢様が、抜け出さなかったのって始めてじゃないか？」

カルストが、注いだワインをアルスに差し出しながら、言う。

「なにしろ、いい傾向じゃないか。」

アルスが、ワインを受け取りながら、微笑む。

大人達の談笑が華咲いている頃、

ルディアは自室の窓から空を見上げていた。ちょうど真上に満月がある。

なんだろう…、嫌な予感がする。

ルディアはさっきのパーティーの途中から、なんともいえない不安に襲われていた。

声が聞こえるのだ。自分と呼んでいる声が。

ルディアは、部屋のバルコニーに出た。

「ルディア？」

隣の部屋のバルコニーにレジェルが顔をだす。

「お兄様…。」

ルディアのいつもと違う様子に、レジェルはふと不安を覚えた。

「どうしたの？ルディア。怖い夢でも見た？」

レジェルはバルコニーの柵を飛び越え、ルディアのいるバルコニーに降り立った。

ルディアはレジェルにしがみつくと、

「嫌な予感がする。怖い。でも、行かなきゃ。」

小さな震える声で、そう言いきった。

瞬間レジェルの前からふっとルディアの姿が消えた。

「ルディア！！！！？」

辺りを見回したが、ルディアの気配は、感じられない。

「シルフ！！シルフィード！！」

レジェルが呼ぶと、風の精霊が現れた。彼等はあの日からずっと屋敷に留まっているのだ。

「ルディアが消えた！！探して！！」

レジェルがそう言うと、二人は頷いて何処かにきえていった。

「父上に、知らせないと……！！」

レジェルは、アルスの執務室に走った。

レジェルが、勢いよく執務室のドアを開けると、両親に加えカルストとマルタが談笑していた。

「レジェル？どうしたんだ？こんな時間に「父上！！ルディアが……何処かに行ってしまった！！」

レジェルがいうと、大人達は蒼白になった。

レジェルがバルコニーでの出来事を話すと、アルスは真面目顔になり、

「分かった。レジェルとルイーゼはここにいなさい。カルスト。マルタ。腕のたつものを集める。ルディアを探す。」

アルスがテキパキと指示を出し、カルストとマルタがたちあがる。

「その必要はありません。」

突如謎の声がしたかと思うと、執務室の中心に、長い黄緑色の髪をした男がたっていた。

「風の精霊王!？」

アルスは、一瞬驚いたが、風の精霊王が神出鬼没なのは周知の事だと納得した。

「ルディア嬢の居場所まで送りましょう…といたいところですが、今は無理ですね。」

「どついう事です!？」

ルイーゼが叫ぶように言う。

「ウイドン神に言われたでしょう。定の一つです。」

ドオオオオオオオオン！！！！

突如轟音が鳴り響く。

「…何が!？」

「なんだあれ!？」

森の抜けた辺りに、夜の闇より暗い塊があるのが月明かりに照らされて見える。

「あれは？貴方は何か知っているのか？ルディアは、あそこにいるのか!？」

アルスの声が荒ぶる。

「落ち着きなさい。くわしい事は当事者に聞いて下さい。ルディア嬢ならきっと大丈夫です。ご安心を。」

精霊は嘘はつかない。彼がそう言うのなら大丈夫だろう。そう思いながらも不安は募る。アルスは、黒い塊に目を向ける。

「ルディア…どうか無事で…。」

ルイーゼが祈る声が静かな執務室に響いた。

暗い。怖い。でも、呼んでる。
私に助けを求めてる。

ルディアは、黒い塊のなかを進んでいた。

これは…誰かの魔力だわ。こんなに濃い。

ルディアは、気持ち悪くなりながらも、先に進む。

ルディアを呼ぶ声は、

優しくも聞こえ、

冷たいようにも聞こえる、か細い声だった。

魔力の抵抗がどんどん強くなるのをルディアは、感じていた。

頭が痛い…。

カエリタイ。

そんな思いがよぎった。

「だめ！！ダメよ！！私は、ルディア・ファース！！偉大な英雄
ルディルの末裔なんだもの！！！」

ルディアの魔力が、全身から吹き上がる。それは黒い魔力と溶け込み、調和し、辺りはどんどん真っ白になった。

いた。

ルディアの前方に、ルディアと同じ年頃の、黒い髪をした少年が浮いていた。

気を失ってる？

ルディアが近付くと、少年は、ゆっくり目を開けた。

「来たんだ。」

そう言うと、少年は、ポケットから、なにかのメモを取り出し、ルディアに差し出した。

「これは…？」

そこには、複雑な魔導陣が描かれていた。

「属性は…光。用途は？何をするものなの？」

「僕の魔力を制御するものだ。かけてくれていた術師が死んで、効果を失ってしまった。僕じゃ発動出来ないから、代わりを呼んだ。」

「それが私…。」

「君に任せて大丈夫なのかな。なんか…頼りない。」

少年の言い草に、ルディアは、少々カチンときた。

「私はこれでも神童と呼ばれてるんだからっ！」

カッとなって叫ぶ。

「知ってるよ、ルディア・ファールス。ファールス家の奇跡の神童。知らない人なんていないんじゃないの？」

少年は、サラッと流したが、ルディアは、世間で自分はそんなに有名なのかと少々面食らった。

「いいからはやくしてよ。魔力だだ流してけっこう辛いのがわかる？」

そういながらも余裕の表情を浮かべる少年に、ルディアは再びカチンときた。

だが、この魔力がヤバげな事をなんとなく感じ取っていたルディアは、メモに、視線をすべらせる。

複雑かつ繊細な術式だ。

大丈夫。…私ならできる！！

ルディアは、立ち上がって少年から、距離を取ると、丁寧に術を構成していった。

「意外と手際がいいね？」

少年が、嫌味っぽく言う。

「うるさい。集中させて。」

ルディアは、静かに術を構成していった。

どれ位時間がたつたろう。ルディアは、術を完成させた。

あとは、

発動するのみ。

「いけっ！」

ルディアは、力を入れて術を発動した。

幾何学な陣が、回転移動を繰り返し、少年を取り巻いていく。

陣の回転が速くなり、一瞬光ったかと思うと、その一部が少年に取り込まれていった。残りは光の粉となって霧散する。

「やったっ…成…功…」

細かい作業で、神経を使ったルディアは、立っていらなくなりその場に倒れた。

「…っう…あ。だるっ！」

少年は、術がかかった後の倦怠感と戦っていた。

「水と…木の精霊と…風。こんなもんかな。」

少年は自身に術をかけ、倦怠感を取り除く。

「ふう。一応助かったからお礼しとくよ…って、あれ？」

振り返ると、ルディアは気を失っているようだった。

暗くてよく見えないな。

少年は手元に小さなかかり火を出した。

ルディアの方を見た少年は、息を呑んだ。

さつきは逆光で見えなかったルディア・ファールスを改めて見ると、絶世の美少女だった。

噂には聞いていたが、実際に目にとるとやはり感嘆するものがある。陶磁器のような白い肌に美しい金の髪がかかっていた。細かい術をかける作業で、つかれたのか、やや汗ばんでいるところがないとも色っぽい。

この瞳はどんな色だろうか。

ルディアのそばに膝をつき、そつとその顔にかかった髪をはらう。

「こ…こんなところで寝たら風邪ひくぞー。」

ぺしぺしと、頬を叩きみるが、全く反応がない。

完全に気を失ってるな。魔力の消費も激しいみたいだ。

「はやく家に返してあげよう。」

少年が立ち上がった瞬間、

突風が彼を襲った。

「つつ！ー！」

見るとルディアのまわりで、風の高位精霊シルフとシルフィードが少年を睨みつけていた。

この子は、精霊をも魅了するのか…。

そんな事を思いながら、少年は荒ぶる風の精霊と向き合う。

「安心してほしい。彼女には助けられたんだ。悪いようにはしないよ。できれば、家に送ってあげたいんだけど…案内してくれるかい？」

少年は、己の短い黒髪を持ち上げ、ピアスを風の精霊に強調させてみせる。

「その、ピアスは」

「風の精霊王様の…。」

風の精霊達は、攻撃を止める。

あんな放浪精霊王でも、威厳があるといふのだから世界といふのは分らない。

少年は、ルディアを抱えると、シルフとシルフィードの案内でファース家の屋敷に向かった。

どれくらいの時間がたつたろうか。ルディアが、黒い塊の元に行つてから約2時間。ついさつき、黒い塊は真つ白な光に包まれて崩れて行つた。

白い光から、感じるルディアの魔力にルイーゼは一安心した。

「終わった…のですか？」

風の精霊王に尋ねると、多分な。と曖昧な答えが帰ってきた。

「あれはいつたいたんだつたのですか？そろそろ答えて下さつてもよろしいのでは？」

アルスがイライラしているのを隠す事なく、風の精霊王に詰め寄る。2時間の間何度もあそこに行こうとして、その度に風の精霊王に止められていたのだ。レジェルもルイーゼも、もどかしいながらも黙って見ていた。

「そうですね…彼に聞くといいでしょう。」

風の精霊王がそう言つて視線を移した先には、気を失つたルディアを抱きかかえた、黒髪の少年が、立っていた。

「ルディア！！」

「ルディア様！！」

皆がルディアに駆け寄る。

「大丈夫。魔力の消費が激しくて気を失っただけです。」

そう言つて、少年はルイーゼのにルディアを渡す。

「貴女が側にいた方が彼女の回復が速そうです。」

ルイーゼ腕の中のルディアの規則的な寝息を聞いて、アルスは安堵した。

「君は？」

どことなく冷たい口調で、アルスが尋ねる。見たところルディアと年は変わらないふうな少年が、いったい何の関わりがあるのだろうか。

「僕はユオン。先程の魔力の暴走の源です。彼女には、暴走を止める手助けをしてもらいました。何の断りもなく、申し訳ありません。あまり放置しておく周囲に害を来たすので。」

ユオンはそう言いながら頭を下げた。

「何？」

アルスは耳を疑った。ユオンは先程の黒い塊が、魔力の暴走だと言ふのだ。魔力の暴走は、珍しい事例ではないが、あんなに巨大で、持続的なものは例がなかった。

そもそも魔力の暴走というのは術師の感情の高まりが、臨界点を突破した時に起こる魔力の大爆発の事で、大爆発というからには一瞬

の出来事なのだ。2時間も続くのはおかしい。

また、臨界点は魔力の量に比例するので、魔力の高い術師が臨界点を突破する事はまずない。あれだけ巨大な魔力を持つのであれば、臨界点などそうやすやすと越えられはしないはずだ。

なによりもこの少年には、臨界点を突破するほどの感情の高まりがあったように思えない。

アルスは、顎に手を当てて深く考えこんでしまった。

ユオンは、じっとアルスを見ていた。

これが英雄の末裔…。

大体考えているだろう事には、予測がついていたが、それをどう説明したらよいものかと思ひ悩む。

それに、術で取り除いているとはいえ、あれだけの繊細で膨大な術を受けたのだ。ユオンは、今すぐにでも眠ってしまったかった。

ユオンは、深く深呼吸をして、再びアルスを見る。

え？

ユオンは、目を見開いた。アルスの深い藍色だった右目の瞳が紅く変色し、更には虹彩にあたる部分が、十字に裂けていたのだ。

「…レジェル。どう思う？」

アルスは、視線をユオンにむけたまま唐突にレジェルの問い掛けた。話を振られたレジェルも、アルスと同じように右目が紅く変色し、やはり虹彩が十字に裂けていた。

「嘘を言っているようには思えません。それに、なにより謝罪の念と誠意がある。」

「そうだな。わたしもそう見える。」

ここに来て始めてアルスが、ユオンに、優しい表情をみせる。それを見て、ユオンの緊張が少しほぐれた。

確かに謝罪をしにきたのだが、誠意があるなどと言われたので、ユオンは少し照れ臭かった。

「とにかく、今日はもう遅い。君は疲れているようだし、話は明日聞こう。」

アルスの言葉に、ユオンは安堵する。このままだと、確実に途中でダウンしていたはずだろう。休んでいいと聞いた瞬間から、体中の力が抜けて行くのを感じる。

「部屋を取らせるから、そこで休みなさい。ご両親には何か言ってきたのかい？」

アルスの言葉に、ユオンは表情を曇らせる。

「両親は…死にました。2・3時間程前に。」

ユオンは、困ったような、泣きそうな表情でそう答えた。直後、何の前触れもなく意識を手放してしまった。

「と…おいつ！」

アルスは、ユオンを抱きとめる。突然過ぎたので、おいおい焦っていた。

「うわっ！大丈夫なんすかねこの子。」

カルストが、駆け寄ってきたので託す事にする。

「だいぶ疲れていた上、緊張していたようだ。」

「もともと限界だったその上に、貴方が威圧なさるから…可哀想に。」

ルイーゼに言われて、アルスも少しやり過ぎたかと罪悪感を感じた。

「…両親が亡くなったって言ってましたね。これから行くところとか…あるのでしょうか？」

レジエルが、ユオンを見てぼそりとつぶやく。

強い子供だ。両親がなくなった悲しみは、最後の一瞬までひとかけらも見せる事はなかった。

「とりあえず、明日話を聞こう。レジエルも、もう寝なさい。お前はまだ目に慣れていないから疲れるだろう？」

「はい。そうします。おやすみなさい。」

そうして、ルディアの誕生日パーティーの夜は幕を閉じた。

目覚めた君は。

ルディアは、いつものように自室で目を覚ました。

「ルディア！よかった！起きたのね！」

「母様。」

はつきりしない頭で、何故母様がここにいるのか分からなかったが、段々と昨日の出来事を思い出していった。母様はきつと心配してずつついていてくれたのだろう、と理解する。

「そうだ…私。そうか。」

ルディアは、少年に術をかけた所まで思い出したが、そこから先、どうやって屋敷まで辿り着いたのかはどうやっても思い出せなかった。

「母様。私、どうやって帰ってきたの？」

「ユオンが連れて帰ってくれたのよ。」

「ユオン？」

ユオン？誰だろう。

ルディアは聞き覚えのない名前に首を傾げる。

「ユオンを知らないの？名乗ってないのかしら…。黒髪の男の子よ。貴女を呼んだって言う。」

「ああ。ユオンって名前なのね。」

ユオンとは、昨日のあの術をかけた少年の名前らしいと納得した。

…あんな術をかけた後で動けたのかしら。

ルディアは、ベッドから降りて大きな伸びをした。

「もう大丈夫なの？何をしたかは知らないけど、昨日はだいぶ魔力を消費していたのよ。」

「うん。大丈夫。まだ完全に回復はしてないけど、動いても問題なさそう。」

母様を安心させるために、笑ってみせる。

母様は、心配症だからね。

「あ。母様。今、ユオンは何処にいるの？」

「南棟の1番食堂よりの客間よ。さあ、その前に着替えなさい。」

ルイーゼに着替えを手伝ってもらってから、ルディアは南棟に向かった。

ショートカットルートの中庭を通っていると、見知らぬ男が立っていた。黄緑色の長い髪に、オリーブ色の瞳。普通でない独特の雰囲気

気のある人だ。

緑の髪に、緑色の目、それに……。あの人はまさか……。

ルディアは、昔、地の精霊王から聞いたある人の特徴を思い出した。

「貴方は…風の精霊王様？」

彼もこちらに気付いたのか、微笑みながら近寄ってくる。

「はじめまして。ルディア嬢。よく分かりましたね。」

につこりと笑って風の精霊王は、ルディアのあたまを撫でる。

「やっぱり。ベリルやリュシカと同じ感じがするもの。」

それに、風の精霊王は、全体的に緑色で常に笑ってるロリコンだ。ってベリルが言ってたわ。」

かつて地の精霊王ベリルが言った言葉を思い出しながら、ルディアはふと疑問に思った。

ロリコンってなんだろうか。

「ははは。ベリルは次に会ったら微塵切りですね。」

風の精霊王は、笑顔は笑顔でも、どことなく怖い笑顔でそう言った。

「ところで、ルディア嬢。水の精霊王が名を許したのですか？」

「うん！リュシカが名前で呼んでいいよ。っていつてくれたわ！」

風の精霊王は、目を見開く。

七人の精霊王の中でも堅物ランクが高いリュシカが名を許すとは…。

精霊王の、名を呼ぶことは、精霊王からの信頼の証であり、とても名誉な事であると同時に、名を許される人は数少ない。

「ふふふ。そうですかあの彼女が…。」

リュシカは中々人を信頼しないのでとても珍しい。

「？何が可笑しいの？」

キョトンとしているルディア。

「いいえ、なんでもありませんよ。…ルディア・ファールス。私の名を許しましょう。私の名は、ゼフィルスといいます。」

それを聞いて、ルディアは一瞬ポカンとしたが、すぐ我にかえった。

「……え。ええっ！？いいの！？？まだ出会って五分も経ってないと思うよ！？」

「いいのです。リュシカが信頼するものなら私も信頼できます。それに、貴方はユオンの恩人ですから。」

「はあ…。そういうものなの？」

「そういうものですよ。では。私はこれでお暇しましょう。ユオン

によりしく言っというて下さい。」

そう言っつてゼフィルスは何処かに消えてしまった。

ほんとうに風のようにつかめない人だったな。まあいつか。頼れるお友達が増えたと思う。

そう心の中で納得してルディアは、南棟に入っつていった。

ユオンのいる客間にいくと、部屋にはベッドに横たわつて寢息を立てる彼以外は誰もいなかった。静かに近づいていつて彼の顔を覗き込むと、やはり昨日のあの少年で間違いなかった。整った顔に、伏せた睫毛の影が落ちている。

綺麗な子だな。

ルディアは素直にそう思つた。

突然彼が呻き出した。苦しそうな表情をして、汗をながしている。悪い夢でも見ているのだろうか。

ルディアは備えつけのクローゼットからタオルを出してきて、ユオンの汗を丁寧拭いていく。

彼の額にかかる髪をどけようと、彼の顔を覗き込む形になったとき、唐突にユオンが目を覚ました。だいぶ顔が近い位置で視線が合う。

やっぱり綺麗な子だな。

彼の真紅の瞳をみて、改めて思った。

「…え。はあっ！！？」

驚いて声を上げたユオンに苦笑する。

「おはよう。目が覚めたみたいだね。」

ルディアは笑ってそう言った。

目覚めると君が。

夢を見た。

父さんと、母さんが、僕を置いて何処かにいつてしまう夢。

「嫌だ…。父さん！母さん！僕を置いて行かないで！！」

泣きながら追いかけても、追いつくどころか逆に遠のいていく父さんと、母さん。

「僕は…どうすればいいの？」

泣き崩れる自分をみながら、僕は、夢の世界を後にした。

ゆっくり目を開けると、何故か目の前にドアップな少女の顔があった。

「…え。はあっ！！？」

我ながら情けない声を出したと思う。

一瞬、思考が停止したが、昨日の事を思い出して、ここがファースト家である事を思い出す。

「おはよう。目が覚めたみたいだね。」

愛らしく微笑むのは、昨日僕に術をかけたルディア・ファールラスだった。

昨日は見る事ができなかった、その瞳は黄金だった。

「昨日は、倒れた私を送ってくれたそうで…ありがとう。」

ルディアは、はにかみながら言った。

「あ…ああ。こちらこそ術かけてくれてありがとう。」

ユオンも、昨日言い逃した礼を述べた。

ユオンがめざめたのは、太陽がだいぶ昇った時間だった。

「クローゼットに、貴方の着替えが入ってたから、着るといいわ。私は、外にいるから着替えたらず呼んでちょうだい。」

そう言つてルディアは、部屋の外に行つてしまった。

そういえば、自分が身につけている服が全く身に覚えのない物だと気づいた。柔らかな生地で、とても着心地がいい。クローゼットを開けると、昨日着ていた服がはいつていた。それに着替えて、ルディアを呼ぶ。

「必要ないかもしれないけど…わたしは、ルディア。ルディア・フ
アールスよ。よろしく。」

そう言つて手を差し伸べる。

本当に必要ないくらいの有名人だからな。

ユオンは、差し伸べられた手を握り返し自己紹介に答える。

「僕は、ユオン。」

握った彼女の手は細く白かった。

「ところで、ユオン。お腹空いてない？」

「…空いてる。」

よく考えると、昨日は色々あつて朝から何もたべていなかった。

「だと思った。厨房で何か貰いましょう。わたしも、何も食べてないの。」

そう言つて歩き出す彼女の後ろをユオンはついて行く。

「あ。」

「うわっ！…急に立ち止まるな。」

「そういえば、ゼフィルスがユオンよろしく言つていて。って言つて何処かに行っちゃったよ。」

「…そうか。」

あの野郎逃げやがった。

ユオンは今回の件で、彼に説明の一部を任せようとしていた。仮にも精霊王だ。どこぞの誰とも分からぬ自分の言葉よりかは信用してくれるだろうと思っていたのだ。

ユオンは、放浪精霊王ゼフィルスに次会ったら文句の一つでも言うてやろうと心に決めた。

「貴方は、ゼフィルスに名を許されてるの？」

「まあ…不意ながらね。ゼフィルスは、小さい頃から一緒だったし…。」

そこまで言って、疑問が生まれた。

「君も、ゼフィルスに名を許されたのか？」

「うん。ついさっきね。」

「…何もされてない？」

「え？何かって…ただお話しただけよ？」

ルディアは、何でそんな事を聞くのか。というふうに首を傾げる。

彼女は分かってないようだ。奴の本性を…。

ユオンは、風の精霊王にはじめて会った時の出来事を思い出して思

わず身震いする。

「そう…ならいいんだが。」

ユオンの言葉の意味が理解できず、ルディアは困ったようだ。頭の上に、クエツションマークが見えるような顔をしている。

その後、取り留めのない会話をしているうちに厨房に到着する。ルディアが厨房の料理人達からサンドイッチをもらい、中庭で食べよう、というので、二人は中庭に出る。

厨房で貰ったサンドイッチは、ユオンが今までに見た事もないような食材が沢山入っていた。なんだろうかと疑問に思い、ルディアに聞いてみると、南の国のフルーツとか、北の国の珍しい野菜だとかと丁寧に説明してくれた。

はじめて食べるそれ等の食材を使ったサンドイッチは、今までに食べたものの中で最高に美味しかった。

ユオン

サンドイッチを食べているユオンを見ながら、ルディアは違和感を感じる。

昨日とは、違う人みたい。

ルディアは、昨日彼と交わした会話を思いだす。昨日は、どこか棘があるが、子供らしい言い方が多かった。しかし今日は、やや大人びた言い方が多い…。

「おはようルディア。君も起きたんだね、ユオン。」

そんな疑問を感じていると。後ろから、レジェルが声をかけてきた。

「兄様！おはよう！！」

「おはようございます。」

ユオンは、敬語だ。年上は敬うのだろう。

そういえば、ユオンって何歳だろう？

ユオンに関する疑問がまた増えてしまった。どうしてこうも気になるのだろうか。

よく考えると、今まで、パーティーなどで同じくらい年代の子には何人も会っていたが、どの子どもどこかの国の王族だとか、公爵家の跡取りだとかで、気を遣っていた。ユオンに対しては、そういう

先入観が無いので、他の事に気が付く機会が多いのだろう。

私にとって気兼ねなく話せる同年代の子どもは、ユオンがはじめてだったのかもしれないな。

「ルディア、聞いているかい？」

レジエルの言葉にハツとする。

「う…ごめんなさい兄様。何か言った？」

完全に自分の世界にいたので、レジエルが何か言っていたのを聞き逃してしまったらしい。

「まだ、具合でも悪いのかい？」

レジエルは、熱を測るようにルディアの額に手を当てる。

「大丈夫。ちょっと考え事してただけよ。で、さっきなんて言ったの？」

心配するレジエルに、大丈夫だよ、と笑顔を向ける。レジエルは、安心したように微笑む。

「昨日の事を聞こうと思ってね。君とユオンを呼びに来たんだ。父

様が執務室で待つてゐるから行こうか。」

「うん。」

ルディアは、レジェエルに手を引かれて歩きだす。今思えば、ルディアは昨日の事を何も知らない。

ちらつと隣を歩くユオンを盗み見る。すると、彼もこちらを見ていたようでバッチリ目が合った。ドキツとしたが、ユオンが何事もなかったかのように、視線を前にむけたので、ルディアも自然に視線を前に向ける事ができた。

執務室に着くと、レジェエルが執務室の扉をノックする。

「父様。二人を連れて来ました。」

レジェエルが言うと、中から入りなさいと、アルスの声がして、三人は執務室に入った。

執務室では、アルスとルイーゼ、それとカルスト、マルタが何かを話していたようだった。

「おはようルディア、ユオン。昨日はよく眠れたかい？」

「はい。昼までぐっすり寝ていたようです。」

アルスの問いかけに、ユオンが苦笑気味に答える。

「ははは。そうか。それはよかった。」

アルスが微笑み、執務室のソファに座るよう二人を促し、向かいの席に自分も腰掛ける。レジェルとルイーゼもアルスの隣に座り、カリストとマルタは、その後ろで立っていた。

まるで今から裁判をするみたいだな。

ユオンは、あながち間違いではないなと思いながら、小さく深呼吸した。

「さて、昨日の事について聞かせてもらおうか。」

先程の微笑みは、どこにいったのか。アルスが真剣な表情で、裁判の開始を宣告した。

ユオン・バージェス

「少し長い話になると思います。説明と言っても、自分でもまだよく整理されていないので… あった事をありのまま話そうと思います。」

ユオンはそう話をきりだした。

「僕は、東の大国ドルバ王国で父さんと母さんと一緒に住んでいました。

何の変哲もない普通の家庭だったと思います。

父さんと母さんは、二人とも強い魔力を持っていてどちらも光の属性でした。僕は、そんな二人の間から闇の属性を持って生まれてきました。

珍しい事ですが、父さん方の祖父が闇の属性だったので、そちらが強く出たのだろつと言い聞かされてきました。

僕も、そういうことなのだと、あまり気にしてはいませんでした。」

ユオンは、そこで話を一旦切ると、大きく息を吸って再び話し始める。

「ちょうど一週間ほど前の夕方です。

僕は、買い物を頼まれて、夕市に行きました。何の問題もなく買い物が終わらせて、うちに帰ると、風の精霊王が来ていました。

父さんと母さんは、彼に名を許されていて、彼が来る事は珍しい事

ではありませんでした。

父さんと母さんと僕と彼の四人で夕食をとりました。

夕食を食べ終わる頃、父さんが突然、僕にある話をし始めました。

六年前の大地震の時の話でした。

結論から言うと、僕は父さんと母さんの本当の子どもではありませんでした。

あの日、母さんは妊娠していて、もうすぐ子供が生まれるという時に、あの地震が起きたそうです。

そのショックで、生まれたばかりの子どもは死んでしまいました。父さんと母さんは、悲しみました。

地震が収まって、一ヶ月した頃、風と炎と木の精霊王が一人の赤子を抱いて二人の元を訪れました。その子は、異常なほど強い闇の魔力を持っていて、その力はほっておくと周囲に悪影響を及ぼすという事でした。

精霊王達は、二人に言いました。

『今は我らの力でなんとか事なきを得ているが、この子が成長していくと精霊王達だけの力では、どうする事もできなくなってしまう。仕方がなく殺そうとしたのだが、どうやっても殺す事ができなかった。』

そこで力を封印しようとしたが、精霊には光の属性を持つものがな

く、それもできなかった。協力してはくれないか、と。』

二人は、協力する事を引き受け、封印の陣を作りました。その子がつとつもない力を持っていたので、必然的に陣は細かく、膨大な物になってしまった。陣が完全したのは、良いものの、その陣は二人の魔力を足し合わせないと発動できませんでした。

二人は、力を合わせて術を発動しました。

術の発動は成功しました。

しかし、それはギリギリの魔力で組み上げた不完全な封印で、本来の封印術のように、術師の死後もその力を保つ事はできなかったのです。

しかも、発動の際に魔力を絞り出した影響で二人の肉体は、ボロボロでした。

もって十年。それが限界だろう。

二人は、そう推測しました。

二人は精霊王達に自分達が死ぬまでの間は、この子を育てさせて欲しいと願い出ました。

精霊王達は二人に、その子を預けました。

その子どもが、僕だったそうです。

父さんと母さんが、術をかけてから約六年。二人は自分達の肉体にガタが出始めた事に気付いていました。

そうになると、いつ、僕にかけられている術が効力を失い、この魔力が世界に悪影響を及ぼし始めるか…。

二人は、何らかの対策をしておく事にしました。強い光の術師に、術の引き継ぎを依頼しようとしたのです。

そこで思いついたのが、ファールス家でした。

どのみちファールス家なら、いつかこの魔力をどうにかしないといけない機会がやってきてもおかしくないだろう。

二人は、僕を連れてファールス家を訪れる為に、家を出ました。早めに話しを取り決めておこうとしたのです。

でも、二人がここを訪れる事は叶いませんでした。

来る途中、突然二人は倒れてしまいました。そして、静かに死んでいきました。

二人は死に際に、僕に陣のメモを託しました。

両親の死と、封印が解かれた事もかさなって僕は、魔力を暴走させた。

それが昨日起きた事に関する全てです。」

話し終わると、アルスとレジェルはやはりあの紅い十字の瞳でこちらを見ていた。

長い沈黙が続いた。

「…話は分かった。」

アルスのまっすぐな視線を正面からうけとめる。

「…ありがとうございます。」

良かった、途中から自分でもきちんと話せているか分からなかった。なんとか伝わったらしいと、ホッと一息つく。

「…ユオン。その『封印の陣』というのを見せてくれないか？」

「あ、はい。」

昨日、ここに来る際に回収した例のメモは空間魔法で異空間にしまっていた。

取り出してアルスに手渡す。アルスが受け取ったメモを、他の四人も覗き込む。メモを見た途端、全員が目を見張って驚愕した。

「うわあっ…。コレがお嬢様をぶっ倒した封印陣っすか…。」

「なんと言つか……。エグいですわ。」

「おかしいわ。目が疲れてるのかしら。インクの黒い部分が、白紙の部分よりも多く見えるわ…。」

「これ考えるのに、何日費やしたんでしょうね。」

各々が、感想を述べる。

「ルディア。お前：コレを一人で組み上げて発動したのかい？」

尋ねるアルスの肩は震えている。笑いを堪えているようだ。

「そうよ。組み上げるだけで、ものすつごーい時間がかかったんだから。」

「ぶはっ！！あはははははは！！！」

とうとう噴き出したアルスに、ルディアはキョトンとしている。ユオンも大爆笑する彼を前に、目を丸くする。

まあ、六歳の幼気な少女が、こんなアホみたいな難易度の術を一人で組み上げて発動しました。しかも、それが貴方の娘です。なんて言われたら、笑いたくもなるのかもしれない。

「貴方。気持ち悪いですよ。」

ルイーゼが若干引き気味に言う。

「あははは…ふふつ。いや、失礼。さすがはルディアだな、と思つてな。ははは。」

アルスは一頻り笑うと、ユオンに、立って後ろを向くように言った。

「何をするんですか？」

「術の完成度と、発動具合を見ようと思つてね。」

そう言つて彼は、顎に手を当ててジッとユオンの背後を眺める。

何があり、何を見られているのかサッパリ分からないユオンは、黙って言う事を聞く事にした。

後ろを向くと、必然的に隣に座っていたルディアと向かい合う形になる。彼女は、ジッとこちらを見ていた。その瞳には、どこか悲し気な色が見えた気がしたが、彼女はすぐに俯いてしまったのではつきりとは分からなかった。

「恐ろしいほど問題がないな。コレだけの術なら、多少のズレがあってもおかしくないのに…。きちんと発動もされているようだ。」
もういいよ。と肩を叩かれたので、再びソファに腰を下ろす。

「術の複雑さ、細かさ、膨大さを除けば世間一般の封印の陣と変わりはない。封印は完璧に成功している。
ルディアへの影響もないようで、安心したよ。」

ふうー。と息を吐いて、アルスはソファにもたれかかる。

「ところで、ユオン。君は、ご両親を亡くしたそうだが…どこかく宛があるのかい？」

ユオンは、ハツとした。

「…考えてませんでした。」

何もかもが、唐突過ぎて、そんな事まで気が回っていなかった。父さんや母さんは何か言ってたか？いや、二人ともあと四年は大丈夫だと思っていればいいから、そこらへんは後回しにしていたのだろう。

考え込むユオンをみて、アルスはカルストに目配せする。カルストが軽く頷く。

「ユオン。もしもいく宛がないのなら、ここにいるカルストとマルタの養子にならないかい？」

「……………はい？」

耳を疑った。今、彼はなんと言っただか？

「……………養子？」

「ああ。実はゼフィルスから、君が天涯孤独になったから、なんとかして欲しいと言われてね。どうしようか考えていたら、彼等が養子にしたいと言っただ。」

「……………」

ユオンは、空いた口が塞がらない。

ユオンが、そうなるのも無理はない。

マルタと言う人は知らないが、カルストは…カルスト・バージェスは故郷ドルバ王国では超有名人物だ。

ドルバ王国三大貴族筆頭の一族バージェス家の長男で、多才な才能に恵まれながら、『当主とかめんどくさい。』『自分にはむいてない。』と、次男に当主の座を譲り、ファールス家に仕える事にしてしまった、という伝説の持ち主だ。

この話はドルバ王国内では、大地震の中奇跡の生誕を迎えたルディ・ア・ファールスと同じくらい有名な話だろう。

「あははー。驚くのも、無理ないよなー。ドルバ出身らしいし？」

カルストは、軽い口調でヘラヘラと言う。

「俺達には、色々あって子供ができないんだ。いつか、養子をとろうと話していたんだが、なかなか機会に恵まれなくてな!。」

「そこに貴方がきて、天涯孤独だと聞いたもので…。ちょうど髪と眼が私達と同じ色ですし、良ければ、私たちの養子になって下さいませんか?。」

ユオンは、カルストとマルタを交互にみて、どうしたものかと、アルスに視線をむける。

「君さえよければ、了承してあげて欲しい。ルディアも年の近い友達が出るのは、嬉しいだろうし。」

それに、何よりも君はルディアの傍にいた方がいいようだ。万が一という場合があるからね。」

確かに。ファールス家としてもこの魔力はほってはおけないだろう。

「…分かりました。その件受けさせていただきます。」

ユオンは、少し照れくさそうに答えた。

「おっ! 決まりだな!。」

「ええ。よろしく願いしますね! ユオン。」

暖かな笑顔を向けられ、ふと死んだ両親を思い出す。

この人達は、自分のせいで不幸にはしたくない。

沸き起こる悲しみを抑えてユオンは、笑う。

「はい。よろしくお願いします。」

こうして、彼はユオン・バージェスとなった。

光と闇

ユオンが、カルストとマルタの養子になった。

という事は、コレからずっと一緒にいられる。

ルディアは、嬉しかった。

レジェエルは、十歳になった去年から学園の寮に入っていて、今ここにいるのは、ルディアの誕生日パーティーがあつたからに過ぎない。

彼女は、この広い屋敷でメイド達と談笑はすれども、同年代の子と遊ぶ機会など全くなかった。

ユオンが来てくれて、嬉しい。嬉しいけど、どうしてもか素直に喜べないのは、きっと……。

ルディアは、複雑な心境でユオンをみる。

その日の夜。

ユオンはアルスから部屋をもらい、そこで生活する事となった。

広い部屋で、バルコニー付きだ。

なんとなくバルコニーに出る。ほんの少しだけ欠けている満月が、東の空に見える。ドルバの方向だ。

夜風が彼の頬を静かに撫でる。

「眠れないの？」

突然、隣のバルコニーから声がかかった。そこには、ネグリジェ姿のルディアが立っていた。

どういうわけか、隣はルディアの部屋なのだ。そのまた向こうに、レジェルの部屋がつづく。

「別に。ちょっと夜風に当たりただけ。」

「ふふ。敬語外れたね。」

そう言いながら、彼女はバルコニーの柵を越えてこちらに来る。

「慣れないんだよ…。」

ファールラス家という事で、かなり気をつけて敬語を使っていたが、

同年の彼女の前でまで敬語を使う気にはなれなかった。

「ねえ。ユオンってほんとに六歳なの？」

「？そうだけど？なんで？」

「いや、なんか大人びてるなあーって。兄様みたい。」

「そうか？」

まあ、そうかもしれない。魔力の強い者は、脳の発達が著しいと聞いた事がある。その影響だろう。

その条件は、ルディアにも当てはまるのだろうか、彼女は全く大人びていない。

さつき、夕食と一緒にとった時も、サラダの中の人参の存在に嘆いていた。子どもらしい反応だと言えるだろう。夕食の事を思い出して、苦笑する。

「あ。今、私の事を子どもだっと思って思ったでしょ。」

ルディアが頬を膨らませて、ユオンを睨む。

「すごい。よくわかったな。」

悪びれる事もなく言い切る。

ルディアは、拗ねてそっぽをむいてしまった。

そっという所が子どもなんだよ。

と、言おうとしたが、やめた。

沈黙が訪れた。

機嫌を損ねてしまったか？と、ユオンは少々焦った。

「ねえ。」

何か言うべきか考えていると、不意にルディアの方から声がかかった。

「なに？」

ルディアの方を見ると、彼女の背後には月が重なっており、黄金の髪を夜風になびかせるその姿を浮彫りにしていた。

「ユオンはさ……………」両親が死んだ時、泣いてないでしょ。」

ユオンは、一瞬金縛りにあつたかのように動きが止まった。

「…なんで？」

「私には、ユオンが無理してるようにしか見えないの。」

逆光で、陰っている彼女の顔の中、何処か悲しみを湛えた黄金の瞳だけが異様な輝きをもっていた。
スーッと、背筋に冷たい物が走った。体が小刻みに、震える。

「そんなことないよ。」

ダメだ。耐えないと。

「嘘ね。ダメだよ。泣かなきゃ。」

「どうして君にそんな事言われなきゃならない？」

触れてほしくないところにズカズカと入ってくる彼女に、ユオンは得体のしれない怒りを覚えた。

「言っただでしょ。」

ユオンは無理してるようにしか見えない。

無理やり自分の感情を押さえ込んで悲しい事を考えないようにしてる。

しかも、無駄に感情を隠すのがうまいんだもの。

見えて痛々しいわ。」

ユオンは、大きなため息をはく。

「ダメだよ…。君も見ただろ？あの黒い空間を。あれは、僕が悲しんだせいで発生したんだ。あれは、世界に害をなす。僕は、悲しんじゃないんだ。」

父さんと母さんが死んだとき、僕はひどく取り乱した。そのせいで、あの黒い空間ができあがった。

「私が止めたからもう大丈夫よ。」

「分からないよ？こんな気持ち悪い力なんだ。もしかしたら今度は、術を引きちぎるかも。」

自嘲氣的な、きつい口調になった。

「それなら、また私が術をかけなおしてあげるわ。」

だから…ね？

泣いてもいいよ。」

そう言って、ルディアは俯くユオンの頬にそつと手を添えた。

「父さんも、母さんも、僕のせいで死んだんだ。」

沈黙のあと、ユオンがポツリと言う。

同時に、彼の魔力が怪しくうねるのをルディアは感じとった。

「そうかもしれないわね。」

ルディアは、あっさり肯定する。

「僕には、悲しむ権利なんてない。父さんと母さんを殺したのは、僕だ。」

…なのに」

ユオンは、涙を溜めた真紅の瞳でまっすぐルディアを見る。悲痛な表情に、彼女は胸を痛める。

震える声でユオンは続ける。

「父さんと、母さんは、死に際に僕にむかって言ったんだ。『愛してる』って。」

「うん。」

「おかしいよね。」

僕がいなければ父さんも母さんも死なずにすんだのに。もっと生きていたら、本当の二人の子供が生まれて、もっと幸せになれたかもしれないのに。

全部、全部、僕がうばったのに！！」

堰を切ったようにユオンの頬を涙が伝っていく。

添えられたルディアの手も、その涙で濡れていく。

だけど、彼女は決して手を離そうとはしない。

「僕がなんか、いなければよかったのに！！」

あの大地震に巻き込まれて死んでしまえばよかったんだ！！！！」

ユオンが叫ぶ。息が荒く、とても興奮しているようだ。

ルディアは、そつとユオンを抱きしめる。身長は十センチほどユオンの方が高いので、彼女は少し背伸びをする形になった。

ユオンは一瞬戸惑ったようだったが、ルディアの肩口に顔を埋め

泣いた。

ルディアは無言で、彼の悲しみで暴走する魔力に自分の魔力をぶつけて相殺していく。

東にあった月はいつの間にか、昨日の夜のように真上にきていた。

ユオンは大分落ち着いたようで、魔力も安定しだしてきた。

「ユオンは、自分を責めてばかりだね。」

ポンポンと彼の背中を叩く。

「今度は、違う事考えようよ?」

ルディアは微笑み、ゆっくり話し出す。

「ユオンのお父さんもお母さんが、最後の最後、貴方に伝えた言葉は、『愛してる』でした。

貴方はご両親に愛されていた。

貴方が、自分なんていなければよかったなんていって、彼等は喜ぶ?

貴方を憎む事もできたのに、彼等はそうはしなかった。

だったら貴方は、彼等の分まで生きなきゃいけない。

いなければよかったなんて、言っちゃいけない。」

まるで小さい子どもに言い聞かせるような、そんな口調でルディアは続ける。

「わたしはね、ユオンがきてくれてとっても嬉しいのよ？
お兄様は、明後日には寮に帰ってしまうから…さみしくなるなと思
ってたけど、同じ年の遊び相手ができたから。」

カルストとマルタは、ずうっと子どもがほしっていったの。
だけど、父様の権力の暴力により、お暇をもらう事ができず、なか
なか養子選びができないでいたの。

二人ともユオンがきてくれてとても喜んでたわ。

ゼフィルスだって、ユオンを心配して父様に貴方を預けたんだよ？
あと、私が名を許された理由の半分は貴方の恩人だからということ
だったわ。

あなたを心配してくれる人、あなたがいてくれて嬉しい人がこんな
にいるのに、

いなければよかった。

なんて、言わないで？」

ね？と笑う彼女は、子どもっぱさなんて微塵も感じられなかった。

ユオンが、その言葉、その笑顔でどれだけ救われたか…。

ユオンは、また泣いた。しかし、今度は悲しかったからでは、ない。

情けない姿をしているだろう。

これからも、こんな事があるかもしれない。

その度に、きっと彼女は慰めてくれるのだろう。
笑ってくれるのだろう。

「…ありがとう。」

いつか、自分も彼女の力になればと、そう願った。

光と闇（後書き）

王道展開すみません…。

レジェル

ユオンとルディアが、バルコニーで寝付いてしまった頃。

彼等に人影がかかる。

そこには、例の紅い十字の右目をしたレジェルが立っていた。
シルフとシルフィードも一緒だ。

「こんなところで寝たら風邪をひいてしまっだろう。」

彼はそういうと、シルフとシルフィードに言っ二人を各々のベッドに寝かせる。

「彼奴は悲しむ事を封じていたのだな。」

シルフがユオンの部屋の方を見る。

「幼いのに、強がった子だ。昔の誰かさんを見ているようだよ。……
いや…今もか。」

シルフィードが、ニヤニヤしながらレジェルを見る。

「一体誰の事を言っているんだい？シルフィード。」

レジェルは、何処吹く風といった感じた。そんな様子の彼を見て、シルフィードは、頬を膨らます。

「まったく、子どもらしくない。魔力の強い者は、皆そうだ。可愛くない！」

何の反応も示さないレジェルに、シルフィードはつまらなくなったのか、からかうのをやめた。

「ルディア嬢は、優しい子だな。」

今度はルディアの部屋の方を見るシルフ。

「強大な魔力保持者にしては、思考、行動が幼いと思っていたが…全くそんな事はなかったな。」

「ユオンも、彼の魔力も、ルディア嬢さえいれば安心だな。」

シルフとシルフィードは、お互いに頷き、微笑む。

「そうかな？」

僕は逆に心配になったよ。」

レジェルが、暗い表情をみせる。

月にサアと雲がかかってゆき、辺りはより一層暗くなった。

シルフとシルフィードは、顔を見合わせる。

レジェルの、その瞳にはいったい何が映ったのだろうか。

「さあつ。もう僕も寝ようか。おやすみ、二人とも。」

レジェルは何事もなかったかのように微笑み、自室に帰った。

「……やはり、可愛くないな。」

シルフィードの呟きは、夜の闇に消えて行った。

閑話 尊敬できる人。(前書き)

今回は、閑話です。

「ユオン・バージェス」の少し前におきた出来事の話。

この後、「ユオン」の後半と、「ユオン・バージェス」の話に続きます。

閑話 尊敬できる人。

アルスは執務室で様々な書類に目を通しながらペンを滑らせていた。今年はやけに仕事が多い気がするな。

そんな事を思いながら作業に集中する。

ファールラス家の仕事というのは、だいたいが国や部族の交渉の仲立ちだ。

ファールラス家は、どの国にも属しない中立的立場と、先代からの威光、当主に受け継がれる特殊な能力を盾に仲介者という役割をになっている。

他にも様々な事業を展開している。主な収入源としては、各国で「ギヤスGAZ」と呼ばれる、社会組織を経営している。

「アルス。入ってるぞー。」

「!?!」

突然声がかかり、おもわずビクツとする。目の前には、黒髪碧眼の男。カルストだ。

断じて気づけなかった訳ではない。…作業に集中していたのだ。

「カルスト…入って来る前に断りをいれろ。というか、ノックぐらいしろ。」

「まあ、細かい事は、いいじゃない。というか、今更すぎるんじ

やね？それ。

GAZからの報告がとどいたぞ。ユオンについての。」

バサリと机に置かれた資料には、ユオンについての情報がぎっしり書き込まれていた。

「ふむ。いつもながら、仕事が早くて助かるな。」

書類を手に取り、ザッと目を通す。

「ユオン・アレイド

生年月日は、4567年三月七日。
年齢は6歳。

ユアン・アレイドと、リオン・アレイドの養子…。

ユアン・アレイドとリオン・アレイドは、二人とも孤児か…。」

「4567年…大震災の年…ね。」

カルストがポツリと呟く。

4567年四月十五日が、あの大震災の日。ルディアの生まれた日だ。

謎の覚えやすさを持った年である。

「ゼフィルスの話によると、彼はあの大震災の日に生まれた子だとか…。」

「は？」

カルストは、目を見開く。
まあ、当然の反応だろう。

ちなみに自分は、それを聞いた時、飲んでいた紅茶を盛大に吹いた。

「でも、ここには…三月七日って。」

「両親が変に思われないように、気をきかしたのだろうな。」

「なるほど。」

あの時、ルディアの評価は二分した。

彼女が生まれたせいであの大震災が起きたのだと言い出す輩が現れたのだ。

世間一般論として、光の魔法は神聖なるもの、とされているのでその説は瞬く間に消えていったが、一部の宗教団体や、地下組織は、未だ彼女を亡き者にしようと動いている。

公にはなっていないが、これまでにルディアは数回命を狙われた事もあった。

だから、彼女を箱入りにして育てている。

「ルディアお嬢様だけじゃなかったんっすねー。」

「ああ…。しかも、ルディアは一旦は死にかけたが、彼は普通に生

まれたそうだ。」

カルスト目が再び見開かれる。

ここは、驚愕ポイントその二だ。

ちなみに自分は、それを聞いた時、食べていた焼き菓子を喉に詰まらせた。

「…ルディルの真の再来って事が…。」

そう。

かの英雄が生まれた日も、大震災が起きて多くの命が亡くなった。この事もルディアの悪い噂を取り除く種となった。

「ふむ。…決めた。やはり、ファールス家の養子にしよう。」

「え！？ユオンをつ！？」

「ああ。ゼフィルスに頼まれたからな。」

「っえー！…ちょっと待てよ！！待て待て待ってよ！！狙ってたのに！！！！」

「狙ってた？ユオンを？」

「そうさ！マルタと話して、もしユオンに行く所がないなら、養子

にしようって話をしてたんだっ!!」

そうか…そういえば、彼等は、養子を欲しがっていた。

マルタは、大震災の日に妊娠中だった子供を流してしまい、その影響で二度と子を産めなくなっただのだ。二人は子供好きなので、いつか養子をとろう。そう決めていた。

確かに、よく似た容姿だったし…それもいいかもしれない。

そこまで考えた途端、とある考えがアルスの脳裏をよぎった。

「……ハッ！ダ…ダメだ!!」

「え!?!なんでさっ?」

カルストは、アルスが了承する事を確信していたようだった。

「ダメなものはダメだ!!ユオンは、ファーラス家の養子にする!!」

「はああああ!!??」

二人がぎゃあぎゃあと言い合っている中。執務室の外では…

「あれ？どうしたんだ？マルタ。」

執務室の外でティーセットを持ったマルタがオロオロしながら立っていた。

「レジエル様。…いえ、アルス様にお茶を差し入れようとやって来たのですが…どうやら中でうちの人と言い争っているようで…。」

「…またか。」

レジエルは、呆れたふうに言って、執務室の扉を開く。

「父様。入ります。」

「失礼いたします。」

中ではやはり、アルスとカルストが言い合っていた。

「いいや！！ユオンはファールス家の養子にする！！絶対だ！！！！」

「だから！俺とマルタの養子になった方が、共通点があるから彼も気が楽だろ！！？」

なるほど。言い争いの原因は、ユオンらしい。

「マルタ。ユオンを養子にするんですか？」

「ええ。例の通り私達には子供ができませんので…。彼なら、カル

ストと同じ髪、私と同じ瞳と共通点もありますし、そうなければいいなとは思っていたのですが…アルス様は、反対の御様子ですね…。」
悲しげに目を細めるマルタ。

「父様のあれはどうせくだらない理由ですよ。ちょっと母様を呼んで下さい。」

「?はい。」

マルタがルイーゼを呼びに、執務室を後にする。ドアが開閉した事に二人は気づいていない様子だ。

しばらくすると、ルイーゼがマルタと一緒に執務室に入ってきた。

「また、あの二人は…。で、今度の原因はなんですか?」

「どちらがユオンを養子にするか、という話みたいですね。」

「…。なるほどそういう事ですか。」

納得したように頷き、ルイーゼはツカツカとまだ騒いでいるアルスのもとに歩み寄る。

そして…

スパーーーン！！！！

「平手…。」

呆然とマルタが呟く。

カルストは、ピッタリ二歩後退した。
レジェルは、面白い物をみたという顔だ。

「あ・な・た。そこに正座。」

ルイーゼは、人差し指を頬に当て、可愛い仕草でドス黒いオーラを放つ。

「……………はい。」

こうなってしまうば、いくらアルスであろうとルイーゼに逆らう事はできない。

「まったく。あなたという人は。」

どうせ『ルディアが、ユオンのところに嫁いでいたらどうしよう。』とかゆっ、心底くだらない理由なんじゃないか！！」

「？っ。」

図星のようだ。

アルスはルイーゼから目を反らす。

「心せまつ！……！」

カルストがツツコミをいれる。

「ほんとに心底どうでもいい……」

マルタの無表情と棒読みが、何気に怖い。

「ああ。そうさ！……可愛い娘を嫁がせたくない親がいて何が悪い！」

アルスは綺麗に開きなおった！！

カルストとマルタが白い目でアルスを見ている……。

レジェルは、隅の方で笑いを耐えている！

「馬鹿ですか、あなたは！！ルディアにだっていつかは好きな人の一人や二人できます！！」

ルイーゼはブチ切れた！

「いつまでもそんな事を言っていたら、いつかルディアに『お父様ウザい』と言われるようになりますよ！……！」

「ハッ！……！」

アルスは、大人になったルディアが、自分に向かって…

『お父様…ウザい。』

と、言っている様子を想像した！！

「……！！……！」

アルスは、大ダメージを受けた！！もう…（精神的に）立っていない。

ルイーゼは勝利した！

カルストとマルタは、かなり引いている……！！

レジェルは、吹き出した……！！

「親バカも度を過ぎると恐ろしいものね……。」

ふっと、髪をかき上げながらルイーゼが言う。

「さすがルイーゼ！！かつこいー！！」

「一生ついて行きますわ！！ルイーゼ様！！」

カルストとマルタから、賞賛と拍手が飛ぶ。

「という事で、あなた。ユオンは、カルストとマルタの養子にする。
…という事でよろしいですね？」

「……………だがっ！」

「は？」

アルスは、最後の力を振り絞って反抗しようとした！

しかし！ルイーゼの威圧を前に黙り込んでしまった…。

「……………くっ！分かったよ！！認めればいいんだろ！！」

アルスが吐き捨てるように言った。
ルイーゼが満足気に頷く。

「「おおお！！！！」」

カルストとマルタが喜びあう。ユオンが、了承するかどうかという問題は考えないにないようだ。

「あははは!!」

とりあえず、ユオンとルディアが起きたみたいなので、呼んできます。

それまでに、いつも通りになっていて下さいよ。父様。」

レジェルが、二人を呼びに執務室をあとにする。

しばらくして、二人を連れてレジェルは再び執務室にはいった。

「おはようルディア、ユオン。昨日はよく眠れたかい？」

そう言ったアルスには威厳があり、その姿からは先程あんなふざけた出来事があったとはかけらも思えない。

ルイーゼ、カルスト、マルタもいつもと変わらない。

さすがだな。父様達は。
だから尊敬できるんだ。

レジェルは、先程の事を思い出して再び吹き出しそうになったが、
なんとかこらえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9974y/>

第32世界

2011年12月4日07時25分発行